備陽史探訪
持ちまわり記念70号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

藁江庄を歩く

会長　田口　義之

私と坂本さんで担当した松永湾の史跡巡りは、天候にも恵まれ、好評のうちに終えることが出来た。ただ残念だったのは、徒歩例会だったため、見学場所が限定されたことだ。松永には他にも案内したい場所がたくさんある。特に、中世の面影を残した旧藁江荘域の金江町一帯は私の一番好きなフィールドの一つである。

国道二号線を赤坂町で南に折れ、農免道路に入ると、道は次第に上り坂となり、一つの峠を越える。この峠は藁江峠と呼ばれ、難所として知られていた場所である。峠を越える手前で視線を左に移すと、見る者を圧するように山頂を平らにした高い山が目につく。室町時代、峠の向こうに存在した藁江庄の関門、赤柴山城跡である。南麓のため池の土手から登って行くと、道は次第に険しさを増し、鉄塔の辺りからは木の根・岩の角につかまりながらの登りとなる。稜線の出丸に出て、更に山頂の本丸を目指すと、次第に視野が開け、急に平らな場所に出る。目を凝らすと周囲に何段にも削平された曲輪の跡が見られ、ここが確かに城塞の跡であることが分かる。

中世、ここに城が築かれた時代、南に広がる藁江庄は、武将たちにとって垂涎の地であった。今でこそ金江町から藤江町にかけての松永湾の東岸は、交通の便の悪い、いわば福山の〝地方〟に当たるが、当時は柳津や藤江の港を擁した瀬戸内海航路の要地で、備後の表玄関に当たる場所であったのだ。『兵庫北関入船納帳』という室町期の史料によると、兵庫北関、今の神戸港に入港した船の中には藁江船籍の船が何隻か見られ、当時この地が鞆・尾道と並ぶ瀬戸内の要港として栄えていたことが分かる。また、他の史料によると、この地には塩浜、つまり、塩田が存在したことが分かっており、この塩田収入も支配者達の争奪の的となっていたのである。

藁江庄の範囲は、北は柳津町、南は尾道市の浦崎町一帯にまで及んでいたようだ。柳津町の西端には庄園の境界を意味する遍坊地（傍示）という地名が残っているし、浦崎の八幡神社は、藁江庄の鎮守であった金江の八幡神社から別れたものである。庄園の領家は、京都の石清水八幡神社である。同社は、全国の八幡神社の約半数の総本山として知られ、平安時代以来朝野の信仰を集めていた。鎌倉時代の記録によると同神社の庄園は備後に三カ所あって、その一つがこの藁江庄であったのだ。

しかし、室町後期になって世の中が乱れて来ると、庄園の支配をねらって周辺から武家勢力が侵入して来る。最初に入って来たのは、備後守護の山名氏であった。先に紹介した『兵庫北関入船納帳』によると、藁江籍の船は「山名殿国料船」とあり、このことを示している。だが、応仁の乱が勃発し守護の力が衰えて来ると、今まで鳴りを潜めていた土着の武士たちが実力で庄内に侵入して来た。赤柴山城は、室町初期、藁江氏によって築城されたと伝えるが、この藁江氏などもこうして侵入して来た在地武士の一人なのであろう。そして、戦国期になると三原市八幡町を本拠とした渋川氏の勢力がこの地にも及び、同氏が毛利氏に属すと共に、一帯は戦国大名毛利氏の領国と化した。渋川氏のことは余り知られていないが、九州探題を世襲した足利氏の一門で、早くから沼隈半島に所領を持ち、備後への土着と共にこの地にも入って来たものである。

付近を散策すると、至るところに中世の面影が残っている。庄内のほぼ中央に建つ金江の八幡神社は藁江庄の鎮守八幡と推定されるが、庄園を見下ろす小高い丘の上に立てられ、かつてこの神社が京都の石清水八幡社の末社として庄園支配の一翼を担っていたことをよく示している。また、八幡社の東の丘には藁江城と呼ばれる一角が残っている。現地を訪ねて見ると、東から続く尾根続きを空堀によって断ち切り、山頂を平らにならした、まさに中世武士の居館の跡である。地元では、赤柴山城と同じく藁江氏の城と伝えているが、庄内の中心に位置し、八幡社に隣接することから、庄園の支配を担った代官の居館にふさわしい立地である。近くには中世の宝篋印塔の残る真言宗の古刹もあって、赤柴山城と共に是非訪ねたいポイントのひとつである。

中央アジアの旅紀行 Ⅲ

神原　正昭

タシケント

八時三〇分朝食

四時間は熟睡した。それにしても部屋が悪い。ウズベキスタンホテルとはいえ、ホテルの名が泣くようである。しかし、タシケントの朝は爽快でツバメなど小鳥が多くいる。朝食後、ロビー集合。今日のガイドさんの紹介。ウスターモアーマリカさん若い女性である。タシケント大学の学生で、現在、一生懸命日本語を勉強しているところ、将来、日本に行くことが夢だそうです。タシケントは人口二二〇万人で一〇〇以上の民族からなる国で、気候は大陸性で冬はマイナス十五℃、夏はプラス四五℃ぐらいになるとのこと。

一〇時、ホテル出発。バスで中世に建てられた美しい門をもつイスラム教のパラクハーンのメドレッセに着く。門のモザイク模様が美しい。このメドレッセは今も活躍中。この辺りは中世の町並みが最も残っているところである。道を隔てて同じ名前のモスクへ行く。ここに一日五回メッカの方角に向かって拝むお祈りの場所があり、素朴ではあるが何故か熱意が伝わって来る。

ここからあまり遠くない所に、中世からあるイスラム教のカファリシャシ寺院へ行く。この辺りの中世の街は迷路のように複雑である。どちらに向かっているのかさっぱり分からない。

タシケントは日本と同じように、地震の多い都市である。一年平均一五〇回もあるという。一九六六年四月十六日の地震は激震でマグニチュード六・五であった。それいらい木造建物も耐震構造にしているらしい。

新市内に入ると広場が多くあり、広場には水がふんだんに吹きあがっている。砂漠の町で水をふんだんに使うことによって、国力を見せつけているようである。

次にウズベク歴史博物館に行く。この博物館は元の名をレーニン博物館であったという。この博物館も国立である。入場写真代三ドル。

原始時代の遺物やアレキサンダーの征服時の貴重な遺物・ソクイディナのゾロアスター教の遺物、仏教遺物など、時の経つのを忘れて見入ってしまう。ウズベキスタンの南にあたるファヤズ・テペから出土した石造三尊形式の仏陀像や彫塑の菩薩があり、この石像は世界的に有名な物で、クシャーン仏教芸術の傑作と言われている。このような物が無造作に展示されている。また、この辺りのゾロアスター教のオスアリ（納骨器）も数多く展示してあった。この博物館も時間をかけて見る所である。

十三時三〇分。昼食のため、ホテルに帰る。この昼食がクーラーの無いレストランで食事をするので暑い。なみの暑さではない。

食事の内容

大皿に、マトンの燻製・ハムソーセージ・など三種。

その他にトマト・キュウリ・なます・ナン・黒パン・もも・すもも・菓子パン・スープ

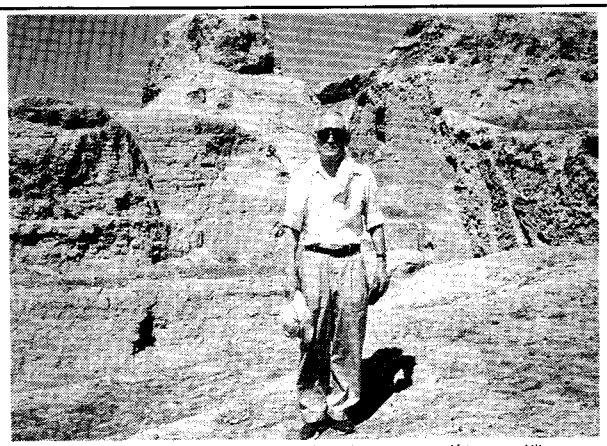
（ウズベキスタンは節電のため、昼は十三時より十五時まで夜は十九時より二十一時までクーラーなど使用禁示である。）昼食も終り次のフェルナガへ飛ぶ準備である。

十四時四〇分。ロビーに集合し、ホテルの外に出て見る。気温はかなりある。アスファルトの照り返しが強い。ネムノキの花が既に満開を過ぎている。日本では、盆を過ぎて満開になるのに、ここでは早い。このネムノキもシルクロードから日本に渡って来たものであるらしい。

十五時ホテルを出発。タシケントと暫くのお別れである。タシケントは帰りにまた一日寄ることになっている。

十五時二十分空港着。予定より少し遅れて空港に着く。ここでもトランク・手荷物の重量検査のため、小さな待合室に入る。部屋には腰掛けなど無いので現地の人が腰掛けなどを用意してくれてなにか親しみを感じた。

この時、突然目の前に、緑眼鬚髯の人が現れる。身長二メートル近くあるソグト人である。このソグディア地方に来て、ソグト人に会って見るのが夢であったという団員の方が写真を撮りたいがチャンスがない。ところが空港内移動車に乗ると、そのソグト人も乗っているので思いきって手振りで話しかけて写真を撮る。写真を送るために住所を聞いたところ、フランスに住んでいて、通訳のオリガさんもフランス語はわからないとのこと。



十六時五〇分。フェルガナ行きの飛行機はプロペラ機で機内が薄暗く、クーラーがないので暑い。

天馬の里フェルガナ

タシケント空港を出発して、飛行機は高度二五〇〇ｍぐらいで飛んでいる。約三〇分で白い地域が見える、塩を採っている所である。北の方ははるか彼方に天山山脈が見える。運河・盆地・山地と言っても、木々は見えない、砂漠のど真ん中に集落が見える、ここが砂漠を開拓した中心だと思う。

それにしても機内は暑い、このとき私は福山弁丸出しの大きな声で、「暑いの」叫んだところ、機内は少しざわめく、少ししてスチュアーデスが飲み物を持ってくる。何かと聞いてみると、岩塩入りの水とのこと、気のせいか少し気分がよくなった。

待望の川が見え始める。川のほとりに水田があるらしい、シルダリヤ川の支流である。この時、飛行機がすこし南へ方向を変えた、突然、雲の中に入り振動が激しい、雲でなく砂嵐である。飛行機は少し高度を下げて砂嵐を避けている。現地の人は慣れているのかあまり気にしていないようである。眼下に街が見える。フェルガナである。今回の旅の目的の一つである。大宛国である。前漢時代の張騫が伝えた、汗血馬・天馬の故郷である。

十七時五〇分、飛行機はフェルナガ空港に着陸する、それにしても滑走路は悪い。空港からホテルまでの道は中央アジア特有の並木道である。

十八時三〇分、ホテルに着く。ホテルはこじんまりとして外観もよいし部屋も普通である。田舎都市のホテルだからこの程度は良しとしなければならない。バスタブは無い、また、シャワーの湯もでない。水で身体を拭く、ここで体調を崩した人も出た。

十九時四〇分、夕食時に、まあ、たいしたホテルでないので、靴を履かずに持参のスリッパを履いていこうとしたら他の人から駄目だといわれ靴に履きかえて食事にいって、これまた、驚きである。原色の強い民族衣装の盛装の若い女性が四人ほどが案内してくれ、日本人いや自分の心の奢りを恥ずかしく思いました。もう少しで民族の誇りに傷を付けるところであった。

夕食後、松崎団長より明日の日程変更があり、北のシルダリア川近くの有名なアフシケント遺跡を見学することにする。ガイドは井上靖を案内した人が来てくれる。フェルガナは天馬の里。月氏と匈奴の関係、張騫のこと、武帝と大宛国、天馬について説明があり心が躍る。

二十二時、アルマトイのバザールで購入したウォッカを飲んで就寝する。

六日目・朝五時に目が覚める。旅も中場である。疲労もピークになるところである。七時朝食。今日の食事は今まで出なかった、どぴん蒸しのようなものが出る、マッセルマー（羊の生肉とじゃがいも・香菜をいれたもの）と言うそうだ。

七時五〇分、ガイドのイギタリさん（男性）。例の井上靖をガイドしたことを誇りとしている人である。ホテルよりアフシケント遺跡まで片道七〇Kmあるとのこと。

九時三〇分、遺跡に到着。この遺跡はナマンガン市の郊外に在って紀元前三世紀からモンゴル軍に攻撃さ

れて廃墟になるまで繁栄していた。シルダリア川を利用し、河岸の崖の上に城壁を巡らしていた。堅固な城塞都市であったらしい、また、下水道管がすでに使用されたり、良質の鉄器の生産をしている。葡萄酒の貯蔵庫も発見されて文化の高さを誇っていたらしい。フェルガナが天馬の里であった頃の城塞都市である。

強い感慨にふけりながらイギタリさんの説明を聞く。遺跡の上に立って眼下を見ると、シルダリア川は、何千年変わりなく、全長二五二〇Kmをアラル海に向かって流れている。

一〇時二〇分。アフシケント遺跡に思いを残しながら、バスに向かっていた時、枯れ草を頭に乗せ原色の強いシルクの服を着た少女が二人こちらに向かって歩いて来る。足は素足である。砂漠での生活の厳しさを垣間見る気がした。

帰りのバスの中でイギタリさんに良馬について話してもらう。フェルガナはシルダリア川の中流の盆地、大宛国。東西交通の要地で漢の武帝の遠征で名高い汗血馬と呼ばれる名馬の産地などと説明している。長くなるので、また別の機会に書くことにする。

十一時二〇分。バザールを見て歩く。市場は大きい、原色の強いシルクを着た女性が多くいるカメラを向けても怒る人はいない。ガイドさんのおごりで西瓜・メロンを買う。

十二時二〇分。ホテルに帰る。レストランでフェルガナでの最後の昼食を取る。食事が終わるとサルマカンドへの出発である。

十三時四〇分。イギタリさんと別れて、西へ向かって進んで行く、大宛国とお別れである。日本人が一〇名以上フェルガナに入ったのは私達が初めてのこと。

バスはクーラーが効きない。サマルカンドまで五〇〇Kmである。頭では分かっていても、身体がついて行くか心配である。バスは運転手二名と通訳のオリガさんと私達十四名、計十七名。

（続く）

奥出雲神話、八岐の大蛇退治と天叢雲剣と十握剣のルーツを探る

柿本　光明

神代は悠遠であり、無限に近い。われわれの祖先たちが営々として創りあげてきた過去数千年に及ぶ日本の歴史は、現在われわれが生活しているこの大地を舞台として、展開されてきた。

日本の歴史の流れも、緑の山々に囲まれ清冽な水の流の如く、尽きずして流れつづけている。村々の古老の語り話してくれたことは伝説であり史実ではなく神話である。またその土地にある地名は神代史を研究する上で価値あるものである。『古事記』『日本書紀』といえば、日本国創世のドキュメントであり、神話と史実がダイナミックに展開された一大叙事詩であるが、その中で須佐之男命は、主人公の一人として実にドラマチックに描かれている。

その須佐之男命の軌跡。高天原での乱暴の限りを尽くして追放された彼は、中国山地は吾妻山、三国山、鳥帽子山、船道山などいずれも一〇〇〇メートルを越える山々を背景とする高原の町、島根県横田町に降臨した。この地上への第一歩がすなわち日本国の始まりと言っていい。さて横田の船通山（鳥上山）というのは標高一一四三メートル出雲（島根）伯耆（鳥取）安芸（広島）の県境に配され花崗岩と流紋質砕屑岩から成り立ち、古代より良質の砂鉄が得られた。

因幡と美作との国ざかいにある那岐山（一二四〇メートル）は伊邪那岐命が天降られた地で、那岐の地名は命の名が由来といわれ、山頂には那岐神社があったと言う。現在、町名は奈義町といって、一九五五年北吉野、豊田、豊並の三村が合併し町制を施いている。

それに続く蒜山（一二〇二メートル）高原一帯（川上・八束村）には高天原といわれ西茅部郷原を信じられてきた。岩倉山の中腹にある巨岩は、天の岩戸と呼ばれ、その下の方に大きな岩が落ちており、岩戸をふさいでいた扉岩が手力男神によりなげられたまま転がっていると言われる。天照大御神が天の岩戸に隠れて闇夜となり、それで呼び出そうと常夜の長鳴き鳥を鳴かせたところ、朝が来たのかと岩戸を開かれた神話は、あまりにも有名な話である。川上村

の天の岩戸の近くに鶏声という地名があるがつけられたのは、ここからであろう。また、天の安河という地名は高天原に流れる神聖な河で、この川原に天照大御神を始めとする神々が集まり神事が行われたという神話によりここにその名がついたという。ここから天の岩屋の国見の峠の方へ向う途中に、高天原神話の舞台と称される岩倉山から、流れ落ちる霊験あらたかな滝として、『古事記』にある地名からその名がついた真名井の滝がある。天の真名井の滝の近くにかかる、天の浮橋を渡り山道を登ると天の岩戸に辿り着く。豊栄、大蛇、祝詞などの地名があり、吉備の国高天原説をより有力にしている。

よく晴れた秋の夜明けより早朝にかけて、どこからともなく深い霧が湧き出して山々は白いベールに包み込まれ、その風景は、海に島が点在しているような幻想を感じさせる。この霧海を西南に六〇キロほど下るとそこには、比婆山（広島県西城町）標高一二五六メートル竜王山、立烏帽子、烏帽子、池ノ段、吾妻山などそれぞれ一二四〇メートル級の峯が連なり、いわゆる比婆山連峰で、神話の郷、伝説のふるさとであるが古事記にまつわる比婆連峰については『備陽史探訪』69号に投稿しているのでここでは「奥出雲の神話と伝説の里」について出稿したい。

雲南地方は、奥出雲と呼ばれ、古代文化の中心であった一出雲国」と山陽の一安芸の国」との中間に位置し陰陽の文化・経済の中継地として古くより栄えた。

斐伊川には、「須佐之男命」が「八岐の大蛇」を退治し「稲田姫命」を救い妻に迎え須賀の里（大東町）に宮殿を建て、「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」の歌を詠まれるなど、出雲神話の舞台となった地名が数多く残されている。また「須佐之男命」が「八岐の大蛇」を退治して出てきた「天叢雲剣」にまつわる、古代製鉄の文化「たたら製鉄」の遺跡や資料も数多くある。

伊邪那美命は当時比婆山におわしたがお体に変調をうったえられ、女神の突然のことに伊邪那岐命はいたく心をいためられ、急ぎ故郷比婆山へ向わせられたが、この時日本海方面を巡航の途中で島根方面から入山遊ばされ、まず吾妻山（一二四〇メートル）にお立ちになり「噫々吾が妻よ」と大声でお呼びになったので、この山名が生れたという。

神々のリゾート地としての吾妻山は、島根県横田町と広島県比和町の県境にそびえたつ山である。広島県側の西山麓〃池の原〃はブナ自然林と池のある草原地帯で、島根県横田町側の東山麓は大膳原と言われ、なだらかな芝の草原が限りなくひろがっている。山頂に登ると三六〇度の展望が開け、近くは県境の線上に並ぶ烏帽子山（一二二五メートル）毛無山（一一四四メートル）三国山（一〇〇四メートル）船通山（一一四三メートル）などの山々が迫り、遠くには三瓶山や霊峰大山を望む。

この吾妻山からクジラの化石が発見された。昭和56年七頭のクジラである、さらにサンゴや玉貝なども発掘された。また、吾妻山八合目の大膳原から、砂岩と礫岩で出来た海成層があらわれ、貝やウニの化石が見つかった。それは今から千五百万年前のものであるという。標高一〇〇〇メートル以上の山からの発見は極めてまれである。

中国山地は大昔は海底だったのであろう。地球がまだ幼い頃、地表は定まることなく、隆起陥没を繰り返していたのではあるまいか。やがて最後の隆起が始まった。

吾妻山、烏帽子山、毛無山、比婆山連峰、三国山、船通山など現在の一〇〇〇メートルを越える山地となり横田（島根県）は盆地となった。

横田町を紹介するときこの人（神というべきか）を抜きにしては語れない。八岐大蛇退治で名高い須佐之男命である。

その須佐之男命の人物（？）像を村の古老から聞いた話でちょっと追ってみたい。

小さい頃の須佐之男命は毎日泣いてばかりいて、父神の言いつけが理解できていたが青年期になって極端に変貌し、いたずらや乱暴がひどくなり姉神、天照大御神のお怒りになり高天原を追放され、須佐之男命は天の鳥船を作って地上を目指す。そして雲海ただよう比婆山連峰の船通山の山麓横田に降臨された。

世の中で横田を選んだ理由…。それは鉄という天然資源と大きな田畑、そして中国山地という天然の要害に囲まれ、日本海側と山陽側を結ぶ拠点として恵まれていたからであろう。降り立った須佐之男命を迎えたのは年老いた夫婦であった。夫は足名椎、婦は手名椎、娘は稲田姫といって表情は美しいがおびえている。

「この土地には恐ろしい怪物がおり頭が八つ、尻尾も八つ。その目はほほずきのように燃えその身は八つの谷を超える大きさで、背には杉や桧が生い茂り、その腹はいつも血にただれて、このままでは娘が食べられ

る」この怪物は八岐大蛇といい、毎年襲ってきては土地の娘を次々と食ってしまい、このままでは土地の娘がいなくなってしまう。

須佐之男命は一計を案じた。

「アルコールの強烈な酒を造れ！」

稲田姫の両親に酒造りを命じた。それは八回も発酵を重ねた酒（八塩折の酒）であった。さらに……

「八つの門のある垣根を造り、その門すべてに酒樽を置け！」

準備は整った。やがて八岐大蛇が八番目の娘を求めてやって来た。と見るや、すさまじい勢いでその八つの頭を酒樽に突っ込んだ。

頃や良し、須佐之男命は愛用の長剣を引き抜き、大岐大蛇に斬り掛かり格闘のすえこれを倒した。大蛇から流れる血は大地を這い、斐伊川の流れをまっ赤に染めた。

八岐大蛇も地上では無敵だが、酒と女性には弱かった。須佐之男命に討ち取られた、大蛇の尻尾から発見された力が天叢雲剣。これは後に、三種の神器の一つとなり現在に伝えられている。

八岐の大蛇伝説（？）いや『古事記』の須佐之男命の大蛇退治を後世の歴史家は次のような解釈をしている。

「斐伊川の氾濫による大災害」

「鉄を掠奪するために侵略してきた高志（北陸）の国の軍隊」

「稲作に必要な水（川）をめぐっての争い」

などなど……。本当のことは判らないが、横田町（島根県）は横長い田畑をもって豊穣の土地であったことと良質の鉄を豊富に産出することからみると「高志の国」の侵略軍という説も面白くなる。

船通山山頂には「天叢雲剣出顕之地と刻まれた石碑が建ち、毎年熱田神宮の例祭には横田の関係者が招待され交流が続けられている。

さて須佐之男命愛用の十握剣…。斬蛇の剣ともいう、その行方…。横田から中国山地を越え東に向かう。やがて吉備（岡山）に入り、出雲王朝を滅ぼした吉備津彦のふるさとでその吉備の津山に「石上神社」がある。この神社にその昔〝オロチノアラマサ〟という名の一剣が祀ってあったという。

また奈良県天理にも「石上神社」がある。この神社は、昔から霊剣を奉祀する神秘的な神社として有名だがそのご神体が〝斬蛇の剣〟とも〝平国の剣〟とも言われている。

これが〝十握剣〟だとすれば、横田から吉備をへて、はるか大和の国まで流浪したことになる。

妣の字について

佐藤　壽夫

前回、第十七回の「古事記を読む」会で「須佐之男の涕泣」の項を学んだ。その中に「僕は妣の国根の堅州国に罷らむと欲ふ…」とあった。

この項で私は「妣」の字について非常に興味をもった。実は妣という字について今から十五年前（一九八二）の二月頃、当時、日中学院院長の藤堂明保先生の『女へんの漢字』という一冊の本に出会い、この本で「妣」という漢字を学んだからである。藤堂氏は漢字の語源研究者の泰斗であり、殊に漢字については色々の著書を発表されている。

さて、「古事記を読む」のレジュメの注釈では、「妣」とは、亡くなった母親をいう。『礼記』に「生日父曰レ母レ死日レ考日妣」に従ったものと、簡単な説明がなされてあった。

そこで、私は過去のあるイメージがあって（妣について）他の辞書を調べてみた。

まず始めに小学館発行の『新選漢和辞典』を調べる。

「妣」＝①母。②亡母。すでになくなった母、漢音　ヒ、呉音＝ビー（bi）となっていた。

つづいて、小学館『国語大辞典』には「妣＝死んだ母。亡母。先妣」とある。そのつぎに、小学館『古語大辞典』を調べてみると、「妣＝死んだ母。亡き母。」「妣同先妣死母日妣」〈色葉字類抄〉となっている。

調べついでに平凡社発行の『字統』〈白川静著〉を調べた。

「妣」7「妃」5（ヒ・なきはは）形声文字。声符は比。

〔説文〕一二下に「没した母なり」とあり、父に考、母似は妣という。重文として妣を録する列国期の金文に、「皇妃（妣妃）」「大宗皇且皇妃」のようにいう例がある。書経の舜典に「二十有八載、帝乃ち殂落（死す）。百姓、考妣を喪うがごとし」とあり、考妣は父母の死後の称として用いる。

最後に学習研究社発行の『学研漢和大辞典』藤堂明保著を紐解いた。

ありました。「妣」（7）呉音、漢音とも、ヒ＝bi。意味（名）はは、死んだ父（＝考）に対して、死んだ母。▽生前には母といい、死後には妣という。「生妣（死んだ母）」「百姓如喪考妣＝百姓（人民）考妣（死んだ父母）を喪うが如し」孟子、万上編にあり。

解字（女十音符（ならぶ））の会意兼形声文字。両側から陰唇の並んだ

女性の性器をヒ・ヒンというが、この場合の比は、父と並ぶ人の意味であろう、と解説されている。

そこで、前での『女へんの漢字』という本で「妣」という字を調べてみると、

比・牝＝女性的なるもの、動物のメスは牝といい、オスは牡と称する。鳥の雌と雄とを見分けることは、全身的なツバサの素振りが手がかりとなるが、ニワトリのヒナのような場合には、その方法が使えない。やむなく性器の形で見分けるらしいが、これは大変な経験と眼力がいる。（現在では国家試験を受け、合格しなければできない。鑑別士）もちろん高給をはむ専門の職業である。ところで動物の場合は簡単明瞭である。ブラリと突起していればオスだし、くぼんだ隙間を伴えばメスである。だから牝、牡ということばもまた、きわめて素朴な性器の特色からの命名に由来している。

牝は「牛＋音符比の略体」から成っている。比とはいうまでもなく、人がピタリと同方向に並んで立った姿である。しかし、その並び方は不即不離、あまり遠すぎては、離ればなれで並んだことにならず、かといって、あまり近すぎては一心同体にくっついてしまう。だからAとBとがわずかな間隙を残して、しかもそばにくっついておらなければならない。ところで、なぜ女性やメスをヒ・ヒンと称したのであろうか。それについては、今日の北京語で尻のことを尻股（ピィクウ・biku）ということが有力なヒントを与えてくれる。

そもそも比とは、同じ物がニク、ピッタリとくっついて並んだことを意味する。比較・比例・比肩なども比とは、すべてその意味である。人間のお尻には両壁がピッタリと並んでいるから屁（尸は、おしりを表す）といい、また、そのすき間をとうして洩れるのが屁（へ）なのである。

いま、女性の、また動物のメスの性器の形を考えてみると、左右の両壁はまさしく比という状態に並んでいて、そのすき間にごく狭い間隙の存ずることがおわかりになるだろう。だから女性の祖先は妣といい、動物のメスは牝といい、どちらも比を音符としている。

比＝妣＝牝＝屁は明らかに同系のことばである。

こうして、過去に紐解いた『女へんの漢字』を再度読みつつ考えてみると、『古事記』のなかに書かれている文字も色々の事柄が含まれているのだと思った。

ここで、はなしは少しそれるが、「還暦」＝「華甲」ともいう。

還暦について少し認識を新たにした。そのことは十干は甲・乙・丙・丁の順序を表すものであり、十二支の子・丑・寅・卯も順序を示す一種の数字であり、もともとその字にネズミ・ウシ・トラ・ウサギなどの意味はない。古代、文字を知らない人に覚えやすいように、動物の名をあてはめたにすぎない。ところが、いったんあてはめてみると、子はネズミらしくちょこちょことよく動きまわり、よく走りまわる。ウシ年の人は、ねばり強く、ウマ年の人はなんとウマらしく活発にみえてくる。

干は「幹」支は「枝」だから、この字もよくその意味をあらわしている。「幹」のほうがもとで、やはり干のほうが重要で、干支（えと）をいうときは、かならず干を先にする。

ところで、十干と十二支を甲子から癸亥に至るまで丁寧に組み合わせると百二十になるが、人間、百二十歳まで生きるのはなかなか難しく、還暦を迎える人などいないことになる。私たちが今干支といっているのは、「甲・乙」とペアにして十二支がどちらかと組めば、他のほうと組まぬことにしている。「子」は甲と組んで甲子となるが、乙子という年はない。「丑」は乙とくんで乙丑となるが甲丑という年はない。こうして半分間引くので六十となり、たいていの人は還暦を迎えることができるようになったのである。

さて、「華甲」だが、中国で還暦のことを華甲という。「甲」は十干の最初であり、年をあらわす。

かぞえ年では還暦は六十一歳である。「華」という字を分解すれば、六個の「十」と「一」からなっている。すなわち六十一である。一種の文字の遊戯として還暦の異名としてもちいたのである。それにしても「華」という字は、はなやかであり、赤いチャンチャンコにふさわしい形容といえるだろう。

中国を中華と呼んだ意味も、この「華」という字にこめられているのではないかと思う。

本題から脱線してしまったが、色々の漢字や言葉には、多くのことがらや、思いが隠されていることに気づいた。学問ということは、いや学ぶということは生涯、人として必要なことと再認識した。

「妣」という字に私は色々の思いでと懐かしさを感じる。

穏やかな貌（かお）、頑（かたく）な魂

平田　恵彦

司馬遼太郎が逝った。

六八号の「虚構と真実」や書評、前号の座談会で司馬に触れたばかりだったので驚愕した。実をいうと、前号の校了直後に訃報に接したのである。何か書きたかったが、どうしようもなかった。今回筆をとったのはそういう事情がある。

昨年、山口瞳が逝ったとき、私は呆然自失となりながらも、すぐに司馬遼太郎のことが頭に浮かんだ。長生きをしてほしいと思ったのである。二人は私にとって特別な作家だった。気障ないい方になるが、生きる上での美学を教えてくれる存在だった。二人を失ったいまの気持ちをどう表現していいかわからない。

その二人が二五年前に「東京・大阪〃われらは異人種〃」（司馬遼太郎対談集『日本人を考える』所載、文春文庫、必読！）というタイトルで対談したことがある（ただし、この対談を実際に読んだのは私が大学生の頃）。

対談は、二人の強烈なツッパリ合いで終始するが、とくに山口瞳の発言はメチャクチャで、ほとんど子供が強がりをいっているようなものである。

その頃私はまだ山口瞳をほとんど読んでなく、その発言にはかなり不快感をもった。何に腹が立ったのかというと、「東京人」と「田舎者」という対比・図式に対してだった。私など、まさに山口のいう「田舎者」に他ならなかったからである。当然司馬に肩入れして読んだが、反面、その発言にもどことなく大阪人のいやらしさを感じた。大阪人はこんなふうに嫌みをいうのか、という感じだった。それは小説の中でも時に感じられるものだった。

しばらくの後、あることがきっかけで山口の作品を読んだ。『江分利満氏の優雅な生活』と『世相講談』である。正直に告白すると、この二つを読んで不覚にも私は涙を流した。『血族』を読むに至って山口瞳の何たるかがわかり、完全にいかれてしまった。惚れ込んだのである。

司馬が亡くなった翌日だったと思うが、NHKが追悼番組を放送した。その中で森浩一氏（考古学者）が、「自分の小説で一番好きな作品は？」と訪ねたら、司馬は「うーん、むずかしいな。二つ答えさせてくれる？」といって『燃えよ剣』と『空海の風景』をあげた、という話をした。

正直意外な感じがした。『燃えよ剣』はともかく、難解な哲学的小説とさえいってよい『空海の風景』をあげるとは思いもよらなかったのである。読者と作者の作品に対する思い入れの違いを改めて感じた。

私の好きな小説はたくさんある。『酔って候』『竜馬がゆく』『峠』『歳月』『坂の上の雲』『国盗り物語』『戦雲の夢』『梟の城』等々…。

だが、最も感動した作品は、と尋ねられれば『故郷忘じがたく候』と『王城の護衛者』をあげる。

前者は文禄・慶長の役の際、薩摩に連れてこられた陶工の子孫、沈寿官氏の話を縦糸にして在日韓国・朝鮮人をテーマに取り上げた短編である。が、司馬が描きたかったのは、人間にとって血とは何か、民族とは何か、ということだったろうと思う。

後者は京都守護職松平容保を描いた中編。書き出しがいい。

「会津松平家というのは、ほんのかりそめな恋から出発している。」

そして静かで劇的な結末――。

私は容保の潔さに打ちのめされた。

ともに涙なしにはとても読めない。

それから何度も書いているが『街道をゆく』はほんとうに好きである。自分でもどこがいいのかよくわからない。が、おそらくそこに人間、人間らしい人間が描かれているからだろうと思う。司馬の心の鏡に写った人間だけのもっている、司馬の言葉を借りれば、その「人気（じんき）」がいいのだと思う。人間をどう見るか、どう評価するということを私は『街道をゆく』から学んだし、何度も読み返す中でこれからも学び続けると思う。

実は、それほど多くはないが、あまり好きでない作品もある。『世に棲む日々』『翔ぶが如く』などである。さきほど書いたが、少し嫌みを感じてしまうのである。

私は最近文学作品（いわゆる純文学）をあまり読まなくなった。大学時代のようなビョーキのせいではない。原因ははっきりしている。

要するに、読んでも読んでも感動する作品に出会わなくなったのだ。感心する小説はある。いや、むしろ上手い小説はありすぎるといってよいくらいだ。しかし、ほとんどの作品から魂を揺さぶるような何かがすっぽりと抜け落ちているのである。まるでそれが悪いものであるかのように。

司馬遼太郎や山口瞳、そして宮本輝（若手ではこの人だけは認める）のような作家はもう出てこないのだろうか。

フィリッピン慰霊巡拝に参加して

三藤　茂

戦後五十年が過ぎたのに、私の心には、フィリッピンの地で戦死した父のことが忘れられない。自費でも早く行かなければと相談するところを探していた。幸運にもこの度、厚生省委託、日本遺族会主催の「戦没者遺児による慰霊友好親善事業」に参加することが出来た。申込み者の中にキャンセルがあったらしく申し込み一回目でパスした。おやじが呼んでいるような気もした。当地で亡くなった日本人は五十万人、広島県では一七、七二〇人、遺児は百万人と推定されている。

全国より参加した遺児七十八名。ルソン島全土、及びレイテ島等、父が戦死した場所により四班に編成。私の班はルソン島北部二十二名。

日程は二月八日より十四日迄、六泊七日、前日安全祈願を靖国で行なった。八日朝成田を離陸四時間ほどでフィリピン上空、赤茶けた山肌が露出している。中国地方に多い鉄分を含んだ土の色。この山の中で戦かったのかと当時を思いやった。マニラ空港に着いて地上に降りたときは、これで永年の夢がかなえられる。おやじが死んだであろう地もあとわずかと異国の地を踏みしめた。

この日はアメリカ人墓地を見学したが、広大な面積で手入れもよく、整然と並ぶ白い十字架に圧倒された。翌日は早速父達の戦死したバギオに国内便で向かった。バギオは高地にあり避暑地となっている。気候は良い。この地にかつて日本の陸軍病院があった。父はここで勤務か、入院をしていた。昭和二十年一月二十三日、米機のバギオ大空襲に当り多数の戦死傷者を出して、父はこの際生死不明となったものである。と二十三年九月、今津町役場（松永市）より文書で通知があった。この地には「英霊追悼碑」があり、三名の遺児が順次「追悼の言葉」を述べた。

父と戦友に広島県を代表して述べるのだから冷静にと自分に言い聞かした。前半はよかったが「お父さん」と語りかけたら声が出ない涙が出る。それでも今迄出したこともない声でなんとかその場をしのいだ。

父の記憶といえば、私が六才の時、出征の前夜だったと思うが、寝ていた私を起して、母の前で涙を拭きながら「お母さんを頼む」という。

私は眠むいのを我慢しながら、不思議な気持で聞いていた。二人の子供を持って、やっとその意味がわかった。妻や子供を残して出征する思いがいかほどであったかと。今更悔んでもしかたがないことではあるが。遺児のほとんどに共通した思いのようだ。無念の思いで死んでいったであろう父達、その後の永い生活難、過ぎ去った五十年、そして豊かになった祖国、そのことが一度に頭の中をかけめぐる。声にならない。

バギオには幸い立派な追悼碑があったが多くは、草原、道端、田んぼの中、海岸で祭檀を組み、日本から持って来た供物をあげて追悼を行うのである。なぜか最後に大声で「お父さーん」と呼ぶ者が多い。六日目にマニラ近郊のカリラヤで合同慰霊祭を行ないすべての慰霊を終了した。慰霊の合間に小学校に立ち寄り、日本から持って来た学用品、衣類等をプレゼント。下手な歌と踊りを披露した。フィリピンの先生や小学生達は踊りや楽器が上手だ。私達も練習してくれればよかったと後悔するばかり。冷や汗を流してなんとか学校を後にした。友好親善になったのかどうか。子供達はボールペンがめあてのようだったが。

当地で見聞した話を少しします。

まずは治安の悪い国である。若王子さんの誘拐事件以後それまで増えていた観光客が半減一流ホテルがガ

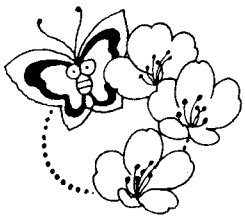
お願い

会報第72号では、「福山の民俗」と題した特集を組みたいと思います。つきましては、皆さんからの原稿を募集いたします。

お祭り、山の神・庚申・塞の神などの民間信仰、寺社・山・樹・岩にまつわる伝説や昔話等を幅広くあつかうつもりでおりますので、皆さん御気軽に、紹介文なり随筆なり小説なりお寄せ下さい。

〆切は五月末日までとさせていただきます。文章の長短は問いませんが、長くても原稿用紙（四百字詰）十枚以内に、なるべくおさめて下さい。原稿の送付は事務局までお願いします。

国見　章子



ラ空きとなったと。日本人による事件も新聞によく出た。現地で今回の旅行の世話をしてくれた島田という人（フィリッピンに留学して現地人を妻とし、現在当地で多方面の事業を行ない日比友好親善に努めている人）の話では、日本は黄金の国と見ているという。日本製はなんでもベスト。日本人と結婚した娘さんはシンデレラ。電化製品は宝物。ボールペンが非常に喜ばれる。日本人を見るとボールペンと手を差し出す。当地で円は十倍の価値があると島田さん。実際着いた日に皆んな一万円をペソに両替したが、一週間小使いに不自由しなかった。それと子だくさん、キリスト教の国で政府は産児制限にやっきとなっているが、思うようにいかないらしい。幼い女の子が妹弟を背負っているのが目に付く。バスガイド（現地人女性で日本語は下手だが陽気で説明は熱心）の説明では娯楽がない、電気はない、あれしかない、子供がたくさんできる。

日本人花嫁候補が増えるということになる。七千の島があり、人口は八千万人弱、生活は日本の戦後十年経ったぐらい。一人の女性が、平均十人の子供を産む。果物は豊富、国民性は陽気で忘れっぽい。目は丸くチャーミング。米は年三、四回収穫出来る。食糧には困らないようだ。

チップが幅を効かす。これもガイドの話。火災が発生して消防署へ電話する、係員の第一声は「金持ち、それとも貧乏」と聞く。貧乏だと消防車がなかなかこない。現地に着いてもチップ次第。燃えているのに放水しない。隣りのまだ燃えていない家のほうに水をかける。チップを多く出す人、すなわち金待ちが火災からまぬがれる。ガイドの家もこれで全焼して現在再建中という。みたところ粗末な家が多い。消防車で消しに行くような家は少ない。交通事故もしかり。ほとんどが日本で廃車になった車両　彼等はエンジンさえ動けばまだ使えるという。外板はブリキで上手に補修している。日本の宣伝文字はそのまま残している。マニラで福山通運のトラックが走っていた。よく目立つ、日本車であることをピーアール出来ドライバーは気分ぶよいようだ。最も右側通行の為、ハンドルとバスの昇降口は日本とは左右反対の為つけかえている。昇降用ドアーの文字が上下逆のバスもあった。日本文字がわからないようだ。スピード制限なし、車検なし、自分の車は自分が責任を持って管理しなさい　ということらしい。信号も首都マニラで少し見ただけ、交差点は早い者勝ち。マニラの渋滞はひどい。だから外国人ドライバーは土日でないと運転は禁示。したがって事故も多い。事故をすると警官が来て、人気のないところへ連れて行って何ペソ出せとチップを要求する。そこで加害者はチップの額の交渉をする。支払うと相手方には、適当なことを言って帰してしまう。最も人身事故の場合は、話は別らしいが。

警察官がこれだから、華僑は絶対に警察を信用しない。すべて自衙、大きなビルには銃を持った者が入口に立っているところがある。

話が長くなるのでこのへんで。

おやじの供養にと、島田さんを通じてバギオの小学生の里親となった。里親と言っても毎年一万円を送金するだけ。将来フィリッピンを背負って立ってくれればと思うが、金額のわりに期待が大きすぎるかも。

最後に、靖国神社の公式参拝、九段会館の敷地に、当初遺児記念館を現在は、平和記念館を建てる意義。

とくにフィリッピンに行ってみてこの度の世界大戦は何だったのかと叫ばずにはいられない。備陽史の会に入ってなお歴史にうとい私、この問題に意見をお持ちの方は、是非お聞かせ下さい。

事務局日誌

●二月三日（土）古墳講座Ⅱ
古墳からの出土物（Ⅰ）
―鏡と装飾品―
中央公民館にて

●二月十日（土）「古事記を読む」
『須佐之男命の啼泣』の項を学習。市民会館会議室にて、参加二十六名。

二月十七日（土）『備後古城記』を読む。中央公民館にて、参加二十六名。

□二月十七日、『備後古城記』を読む、終了後会報発送作業。

●二月二十四日（土）第二回郷土史講座、「松永の歴史」。講師は田口義之会長。中央公民館にて、参加六十八名。

●三月二日（土）『古墳講座Ⅱ』
「古墳に納められたもの Ⅱ」
―武器・武具を中心に―
中央公民館にて十八名参加。

●三月九日（土）「古事記を読む」
『須佐之男命の昇天』の項を学習。市民会館会議室にて、参加二十七名。

□『古事記』を読を終了後、三月例会の資料作成及び行事案内発送作業。

●三月十日（日）徒歩例会『松永湾の史跡巡り』。講師田口義之・坂本敏夫。参加九十八名。

●三月十七日（日）『備後古城記』を読む。中央公民館にて、参加二十三名。

●三月三十一日（日）第三回郷土史講座『古代ののろし』。
講師：七森義人。市民会館会議室にて、参加十六名。

●四月六日（土）古墳講座Ⅲ
中央公民館にて、
参加十八名。

□古墳講座終了後四月例会資料作成。

今後の予定

●四月二十七日（土）午後一時半、第四回郷土史講座『吉備巨大古墳の謎―吉備王権は存在したか―』（於中央公民館）
講師：網本善光
…最新の考古学成果をふまえて吉備の巨大古墳の謎を探ってみます。（資料代百円要）

●五月五日（日）第十四回親と子の古墳めぐり。今回は加茂町から駅家町にかけての古墳めぐりコース。要項は次ページに掲載。

●五月二十五日（土　第五回郷土史講座『福山の神社信仰』
講師：神谷和孝名誉会長
福山市民会館会議室にて。
…久々に名誉会長の登場です。どんな話が聞けるか楽しみですヨ。

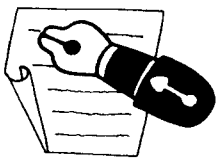
●六月九日（日）バス例会
『因島・向島の史跡めぐり―村上水軍の光と陰―』
講師：木下和司・日野雅友
…はじめての例会担当に両人ともハリキッてます。

『山城志』第一四集原稿募集

原則として日本史、郷土史に取材した論文、随筆、紀行文、小説（審査あり）、短歌など四〇〇字詰め原稿用紙三〇枚まで。

第一回原稿締切は六月末日です。予定した原稿量が集まらない場合には随時原稿締切を繰り下げます。

送り先は備陽史探訪の会事務局宛まで。



平成八年度会費納入について

当会は、会員の皆様の温かい眼差しと会費によって成り立っております。未だに会費を納めていない方は早〜急に納付して下さい。五月十日を締切とさせて頂きますので、それまでに納付されない場合は残念ながら会報の発送は止めさせて頂きます。〝忘れていた！〟と言うあなた、今すぐ送って下さいネ。会の行事の際に持参されても結構です。

年会費は個人会員三〇〇〇円、夫婦・親子会員四〇〇〇円です。

第十四回　親と子の古墳めぐり

〔主催〕　備陽史探訪の会
事務局・〒720福山市多治米町
五ー一九ー八　田口義之方
TEL五三ー六一五七
〔共催〕　福山市教育委員会

一、目的
親と子の古墳を中心とした古代文化とのふれあいを通して、子供に歴史に対する関心を抱かせるとともに、古墳など文化財に対する知識とその正しい取り扱いなどを学ばせ、併せて郷土に対する認識を広めさすことを目的とする。

二、日時
一九九六年（H八）五月五日（日）　＊小雨決行
AM八：一五　福山駅前釣り人像前集合　受付
井笠バス東城行八：四〇、九：〇〇に乗車出発、バス代五一〇円
（現地集合も可…加茂公民館に九：一五分までに集合）
PM三：〇〇　現地解散

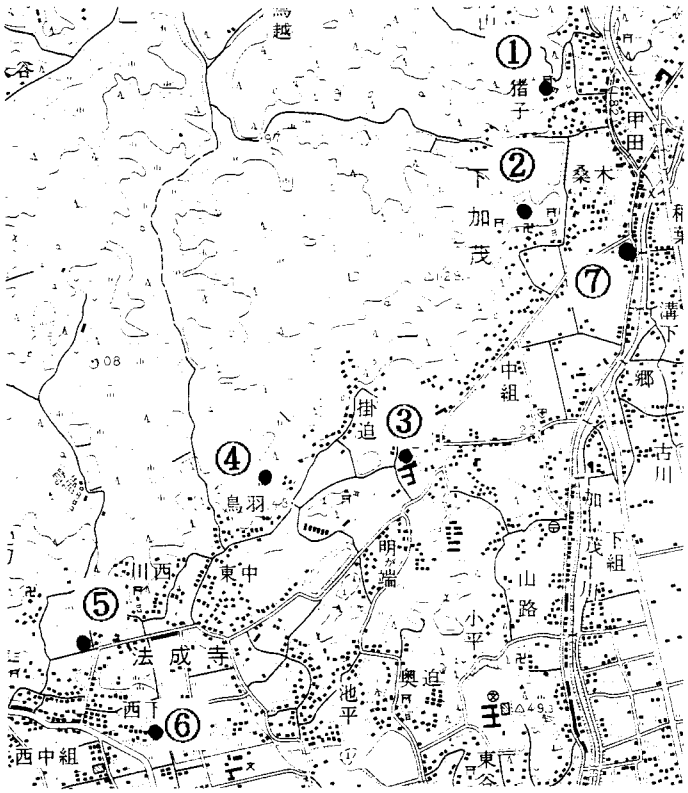
三、見学場所
福山市加茂町～駅家町にかけての古墳
…猪の子古墳→正福寺裏山古墳群→土井塚古墳→掛迫六号古墳→山の神古墳→二塚古墳
＊備南地方では珍しい前方後円墳の正福寺裏山古墳群から竪穴式石室の掛迫六号古墳、後期の初期横穴式石室の山の神古墳、巨大な横穴式石室墳の二塚古墳、横口式石槨の終末古墳の猪の子古墳など、芦田川流域を代表する古墳を見学します。

四、参加資格
五～六Kmの行程を歩行可能な方、但し、小学校六年生以下の児童については保護者の付き添いを必要とします。

五、参加申し込み
往復はがきに参加希望者と各自の年齢、住所、電話番号、参加者同士の関係（小学生は学年も）を明記の上四月二七日必着にて上記事務局まで申し込みのこと。
（但し、先着一〇〇名程度になり次第締め切ることがあります。又、電話での申し込みは受け付けません。）、又、大人単独参加も可能です。

六、参加費
資料代、保険代込みで大人五〇〇円、子供三〇〇円
現地までの交通費は各自負担になります。

七、その他
弁当、飲み物等は各自持参して下さい。
服装は山歩きの出来るものを装着して下さい。



①猪の子古墳
②正福寺裏山２号古墳
③土井塚古墳
④掛迫６号古墳
⑤山の神古墳
⑥二塚古墳
⑦加茂公民館（現地集合場所）

青春１８切符史跡の旅

時刻表マニア兼地図マニアＮ

Ｐａｒｔ　１

みなさん青春１８切符って知ってますか。これは、ＪＲの普通列車なら１日（０：００～２４：００）乗り降り自由な切符です。

この切符を最初に使ったのは、今から16年まど前で初めて兵庫県龍野市の城山（赤松氏の最後の地）に行った時だった。今では、青春18切符がよく使われるので、岡山から姫路の間が混んでいて座れないときもあるが、当時は岡山から大阪まで行く電車があり、４人掛けの椅子に１人しか座らないという随分余裕のある席であった。ＪＲ龍野駅から龍野の城跡を通ってマイクロウェーブ塔を過ぎて痩せ尾根を通っていった。人っ子一人いない山の山頂に赤松氏の墓石が立っている。日暮れの早い冬だから木に囲まれた山の中は薄暗く感じられ、この城山が古代の山城と考えられているのでここへ登って来たが少しさみしくなってくる。遺構そのものは、山頂よりも少し北の亀ノ池方面への道沿いに最初にあるのでそちらへ向かい、礎石らしきものを見た後、池へ。誰もいない山の中に大きな池があり、新宮へ降りる道へと早々に向かう。強風と、太陽が陰り始め寒い暗い。山の中で暗くなると帰れない。この言葉が頭の中を過る。新宮への道を降りて行く途中で礎石らしきものを見て帰る。麓へ降りらと完全に真っ暗。もう家の光が点いている。なんだかわびしい集落の中を過ぎて駅に向かうがＪＲの駅は無人で一人わびしく列車を待つ。ああーおなか減ったどこか食べるとところは、あれー無い。じっと我慢して姫路にて食事をする。

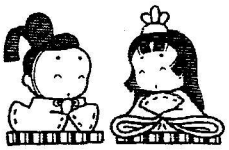
しかし、昔の事を思い浮かべてみると随分変わった。岡山と姫路の間が座れないほど混むようになったし、岡山から大阪への普通電車もなくなった。四国への宇野と高松の間の宇高連絡船もなくなり、それとともに高知行きの夜行普通列車がなくなった。しばらくは、ＪＲバスの高知行きがあったが、これも今はなくなってしまった。しかし、九州方面へは、ムーンライト九州という夜行の普通列車が走るようになった。これによって九州方面へ出掛けやすくなった。これらの電車を使って多くの史跡・博物館を訪ねやすくなった。

このように、青春１８と言っていても、これは心が青春のように自由に気ままに乗り降りするという意味で、今では青春の人よりも心だけ若く体が伴っていない人の方がずっと多い。

新入会員紹介

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

奥様入会により夫婦会員に



掛迫6号古墳測量調査中間報告

―冬過ぎて
　春来たるらし掛迫な
　かすみて浮かぶ
　山の桜木―

てなわけで、昨年秋から準備を始め、冬より本格的に測量体制に入った掛迫6号古墳測量調査は四月現在で全体の約四分の一ほど終了した段階です。三月までは毎週日曜日に行っていた測量も、四月からは月二回のペースとし、朝も早くから夕方遅くまで頑張っておるのです。

花粉症平田氏は大きなマスクをし、「このあたりはスギがないからいいですよ」と言いながらも、鼻をスルズル目をウルウルさせて立派な花粉症状の真っただ中での調査参加、鬱病山口は今年初めに風邪でダウンし、磁気探査にも参加できず症状はますます深みに入っていたがようやく持ち直し「腰が痛いのう」と言いながらも中腰でアリダードからスタッフ（箱尺）を覗き込み、平板を描いている。飛び跳ね網ちゃんは連夜の勉強の疲れからか、寸暇を惜しんで目を伏せ膝を抱えて小さくなっている。この様子だと大好きなコンビニの徘徊も最近は出来ない様子。仕事多忙症候群にかかっている七森氏は最近顔が見えないのが寂しい。そんな中縦横無尽に動き廻っているのが篠原氏、そこで声がしていたかと思って顔を上げるともう向こうにいるし、怒号が聞こえたかと思うと「お～、すげーの～！よしゃよしゃ」と明るい声が聞こえてくる。他、高端氏、小牧氏、三輪氏など各諸氏の協力により調査は進んでおります。そんな中で特筆すべきは今年高校に進学した田頭さん、最近の参加者の中での紅一点、将来は考古学を専攻したいしたいと言う若きホープは篠原氏の指導よろしくスタッフを置く姿も板に付いてきた。

コンタラインが一本、また一本と引かれていく毎に参加者の思いが凝縮されていく。休憩時間ともなると皆平板の周りに集まり「出てきたなあー」「ウーム」と口々に覗き込み、自分たちの参加したものが、協力し合ったものが一本の線として現れてくることの喜びを味わっている。

そして、いつものように黄昏がせまると、体は疲れているが充実した気持ちで山を下り、「お疲れさん」と手を上げ、車に乗り込む。一台、また一台と車はそれぞれ違った方向に走り去っていく。やがて、小川が大河に流れ込むように車の流れの中に溶けて見えなくなっていく。

（追）

三月、四月は雪や雨で数回中止になりましたが、それを考慮に入れてもまだまだ時間はかかりそうな様子です。あせらずゆっくりと確実に進める予定でおりますので引き続き皆様の御協力をお願い致します。

（文責：亀の調査隊）

お知らせコーナー

『東城町史』古代、中世編が出ました。東城町の古墳や山城がバッチリ載っております。ご入用の方は県立博物館で販売されています。一冊五五〇〇円

編集後記

暖かくなってきたと思ったら急に寒くなったり…。それでも桜の花は「春」を視覚として見せてくれています。いかがお過ごしですか？

前任の磐座亭主人の〝しばらく一休さん〟から今回は私が担当いたしました。彼のように上手くはいきませんでしたが会報第七〇号をお送りいたします。しばらくは持ち回りとなりますのでそれぞれ担当者の個性が出て、違った意味での面白さが味わえると思います。また、ご意見なり要望がございましたら事務局宛までお送り下さい。

それではまた会う日まで。

花吹雪ノ舞フ日ニ之ヲ記ス。

（露雪庵庵主）

備陽史探訪の会事務局　〒七二〇
福山市多治米町五―一九―八
☎〇八四九（五三）六一五七